

VI 課題研究

R7年度 栗東市立教育研究所 調査研究 研究概要図



RAAR サイクルの視点を踏まえた学習による確かな学力の育成 ～言語活動を取り入れた「いち推シート」の活用を通して～

栗東市立教育研究所

脇坂 浩之

I. 主題設定の理由

本市の令和6年度の全国学力学習状況調査（以下学学調査）（国語・算数）で示された子どもたちの平均の正答率は、それぞれの教科で滋賀県平均に満たないものであった。小学校国語科においては、「漢字の定着や言葉のため込みなど基礎的な力を身につけること」や『読むこと』に慣れる授業改善が必要なこと」が望まれている。中学校国語科においては、「問題文を読み取る力が高まる授業改善や取組が必要」とされている。小学校算数科においては、「無回答の児童の比率が高いことから、児童が自ら考える場面を作り、自力解決の経験を積む授業改善を要する」とされている。中学校の数学科においては、無回答と類型外の回答をしている生徒が多くなっており、「粘り強く考え抜く経験を重ねる授業改善や成功を実感させる経験が必要」とされている。^{※1}

一方、毎年4月に実施されている学学調査は、文部科学省の定義している「確かな学力」の一側面を測定することはできるが、すべてを測定しているとは言いきれない（図1）。もちろん、学学調査の平均正答率が高いことは望ましいことではあるが、現在の「生きる力」の理念を土台にしつつ、図1に挙げてある、「判断力」「表現力」「問題解決能力」「学ぶ意欲」等のような、数値化しにくい「確かな学力」も子どもたちには身につけてほしいと考える。なお、平成15年中央教育審議会答申において、変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちに身に付けさせたい「生きる力」の3つの要素からなる力のうち、図1のように、知の側面からとらえた1つが「確かな学力」とされている。「確かな学力」は、「知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力等まで含めたもの」と現在は定義（文



図1 生きる力と確かな学力について^{※2}

部科学省^{※2)} されている。

学習指導要領の総則には、「確かな学力の育成は、第1章総則第3の1に示すとおり、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通した、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して実現が図られるもの」とある。また、令和5年6月16日に閣議決定されている教育振興基本計画では、『主体的・対話的で深い学び』の視点からの授業改善を行うことは、社会の持続的な発展を生み出す人材養成において不可欠である」との記述もある。したがって、教員が授業改善を図り、子どもたちが主体的・対話的で深い学びを実現することで、子どもたちの確かな学力の育成を目指すことができる。なお、「確かな学力」は学習指導要領の総則に「言語活動を通して身につけることが望ましい」とも記述されている。このような「授業改善」を図り、子どもたちの『確かな学力』の育成」を目指して、本研究に取り組む。

また、高須賀(2017)によると、学級での居心地がよくなると、子どもたちの学力は向上することが確認されている。例えば、指導者の意図的・計画的なはたらきかけにより、子ども同士の言語活動が盛んになり、チャイムが鳴った時には子どもたちが、「ああ、楽しかった!」「よし!できた!」そして、「もう(チャイムが)鳴っちゃったんだね?」とつぶやく学習の場面をときどき見かける。このような学習を積み重ねた学級の子どもたちは学学調査の平均正答率だけでなく、「確かな学力の育成」が促され、学校・学級での生活についての満足度も向上し、主体的に学習に取り組むようになるだろう。^{※3}その一方で、指導者が延々と自分のペースで話し続けるような学習では、子どもたちの言語活動は保障されず、「確かな学力」の向上にはつながりにくいと考える。

新明解国語辞典(第5版)によると、「育成」とは、「立派に育て上げること」、「向上」とは「いい方に向かって積極的に進むこと」とある。本論文の主題にある、「確かな学力の『育成』」のためには、子どもたちの日々の学習・単位時間当たりの学習で学んだことも含めて、「確かな学力の『向上』」の事実を積み重ねることが大切である。この「確かな学力の『向上』」の事実を本論文では「学び」と表現する。この『学び』の積み重ねが「確かな学力の『育成』」につながると定義して実践をまとめていく。

これらを踏まえて、子どもたちの「学び」の積み重ねと教員の「指導改善」を大切にす。以下、「授業」は「指導」の一部であるので、教員の教育活動全体を指し示す意味で「授業改善を目指す」という用語を『指導改善』を目指す」と本論文では記述する。)指導者の「指導改善」を促し、子どもたちの「確かな学力」の育成を、より汎用性の高い形で実現できることを目指して、本主題(本研究テーマ)を設定する。そこで、「子どもたちが、自分たちなりのめあてを設定した上で、学びの必然性のある言語活動を取り入れた学習に取り組むこと」すなわち、RAARサイクルの視点を踏まえた学習を継続すること自体が、学びの積み重ねにつながり、子どもたちの『確かな学力』の育成」につながることを、本研究で明らかにしたい。

II. 研究の目標

「栗東版 AAR (RAAR) サイクルの視点を踏まえた学習」を実践することで、教員のさらなる指導改善を図り、子どもたちの確かな学力の育成を目指す。

Ⅲ. 研究の仮説

指導者は子どもたちの現状を踏まえて、子どもたちが学びたい、やりとげたいと思うような学習のゴールの課題を設定し、課題解決に向けて子どもたちと協働して学習計画を立てる。これに基づいて子どもたちは、毎回の学習の開始時に自分でめあてを立てる。そして学習の終わりには1単位時間のふり返しをする。ロバート・Bチャルディーニ（1984）の「コミットメントと一貫性の原理」によると、人々が自分の過去の行動や意見に一貫性を持ち、それに従って行動し続ける傾向があるようだ。

この傾向を踏まえて、いち推シートを活用し、RAAR サイクルの視点を踏まえた学習を実践すれば、指導者の指導改善を促し、子どもたちの確かな学力の育成につながるだろう。

Ⅳ. 研究についての基本的な考え方

1. いち推シートを活用した RAAR サイクルの視点を踏まえた学習について

(1) 栗東版 AAR (RAAR) サイクルについて

図2にあるように、OECD が提唱しているラーニングコンパスに記載されている AAR サイクルは次の通り、「めあて (Anticipation)、行動 (Action)、ふり返し (Reflection)」の頭文字をとった言葉である。学習者が「見通し、行動、ふり返し」を繰り返し行い、自ら主体的に学びを深めるプロセスのことをいう。具体的には、子どもたち一人ひとりが、将来の見通しをもって考え、責任をもって行動し、その行動がどのようなものであったのかを自らふり返る。それを反復することでより良い未来社会を実現しようとする学びのプロセスを指す。

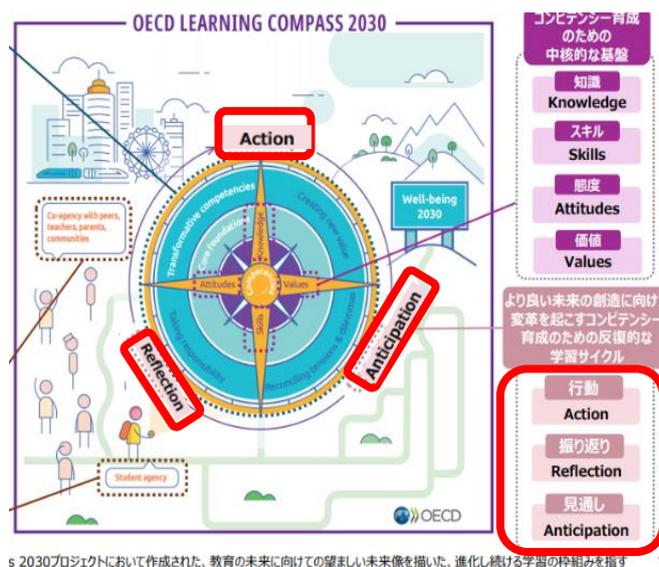


図2 OECD ラーニングコンパス

OECD（経済協力開発機構）は、2015年から進めてきた OECD Future of Education and Skills 2030 プロジェクト（Education 2030 プロジェクト）の成果であり、理想的な教育の実現に向けて方向性を示した「OECD ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030」において、変化が激しく予測困難な時代の中で、一人ひとりがウェルビーイング（心身に加えて社会的にも良好な状態）を実現していくには、「新たな価値を創造する力」「対立やジレンマに対処する力」「責任ある行動をとる力」というコンピテンシーを身につける必要があ

ると報告している。そして、このような力を身につけるためには、AAR サイクルが有効な学びのプロセスだと指摘している。※4

また、方法に間違いがあったり、望ましくない結果が表れたりしたときには、レディネスの把握を含む現状把握に戻り、改めてスタートすることもできる。AAR サイクルのよさとして、このように「取り組みながら、不具合があれば原因を探って、またやり直すことができる」というところがあげられる。

一方、栗東版 AAR サイクル(以下:RAAR サイクル)は、AAR サイクルのプロセスに「Research (レディネスの把握を含む現状把握)」を加えたものである。R (Research) を追加したのは、主題設定の理由で記述したとおり、栗東市の課題として、「基礎的な力を身につけること」「自力解決の経験を積む授業改善を要すること」「粘り強く考え抜く経験を重ねる必要があること」から、子どもたちの「現状・実態」を正確に把握した上で、指導者は指導に当たることが望ましいという思いからである。確かに、AAR サイクルのように「まずはやってみて、軌道修正しながら」ということはレジリエンスを発揮して取り組むことができるよさではあるが、必要以上に子どもたちにやり直しをする機会を設定するのも避けたい。そこで、Research をできる限りした上で、子どもたちに挑戦できる機会を設けることが大切であると考え、「RAAR」サイクルとした。この RAAR サイクルの視点を踏まえて、子どもたちが学習に取り組みながらも、目の前の状況が芳しくない場合は、改めて Research をして、軌道修正しながら学習に取り組むことを想定している。

さらに、この RAAR サイクルは、1 時間だけではなく、一つの単元の流れにも当てはまるので、毎時間、RAAR サイクルの視点を踏まえた学習をくり返しなが、単元を通して、子どもたちは確かな学力を向上させてゆく(図3)。このサイクルによって、単位時間当たりでも、単元当たりでも、子どもたちは学びを積み上げており、学力が向上している。この毎時間の「学びの積み重ね」によって、確かな学力が育成される。

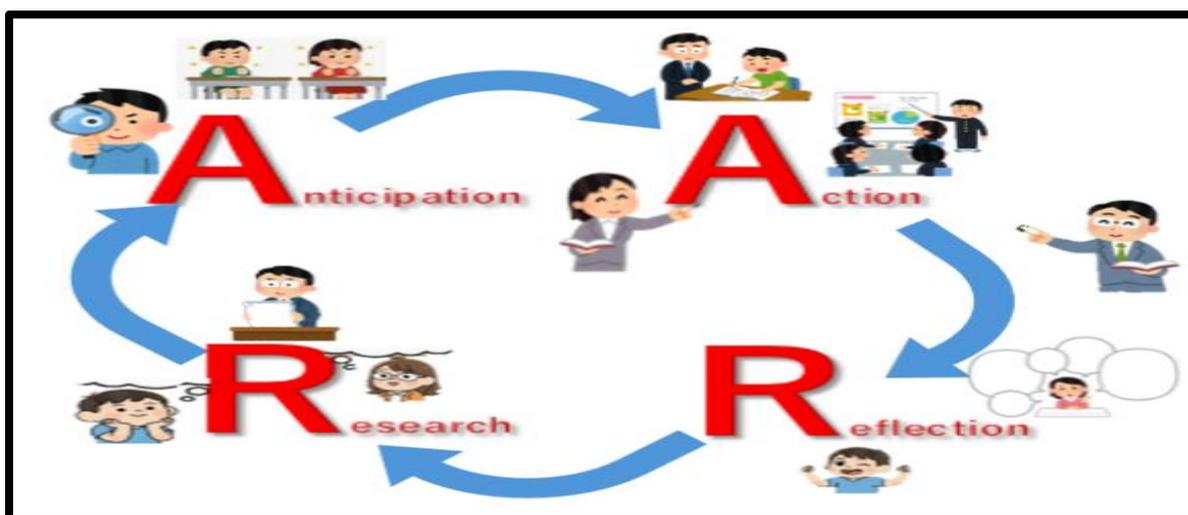


図3 RAAR サイクル

(2) 「確かな学力」の育成と「指導改善」のための RAAR サイクルの各プロセスについて

	子どもたちの学習活動(例)	指導者の指導・支援(例)
Research (レディネスの把握を含む現状把握)	(今の自分の力で) 何ができそうかな。 	(子どもたちに)どのように声かけ・問いかけをするとよいだろうか。 
Anticipation (見通し・めあての設定)	(課題を達成するために) これならできそう。こうすればできそう。 ○○(魅力的なゴール)を達成できるよう、今日は△△をがんばろう。 	(子どもたちが)この課題だとやってみたいと思うだろうか。このように伝えよう。 
Action (言語活動を通した学び)	○○(魅力的なゴール)を達成できるよう、□□を工夫して、活動し続けよう。 	(子どもたちが課題解決に向かえるように状況に応じた支援は)○○だろう。だから☆☆しよう。敢えて見守ろう。 
Reflection (ふり返し)	今日は□□を学んで楽しかった！よくわかった！次は●●をしたい。 	(子どもたちが)学んでいた中で○○の部分強化したい。次の学習につなげるために▲▲の声かけをしよう。 

図4 の RAAR サイクルの各プロセスについて

子どもたちと指導者はそれぞれ、上記の表の RAAR サイクルを通して学習・指導する。(図4) 子どもたちは自分たちの課題設定を単元の初めに終えているので、1 単位時間、どのように取り組むかと良いかを考え、指導者の支援を受けながら、学習に主体的に取り組む。指導者は上記の RAAR サイクルの視点を踏まえた学習を通して、子どもたちが学びに主体的に取り組み続けることができるように指導や支援をする。さらに言語活動を取り入れて、主体的・対話的で深い学びが実現できるように伴走し続ける。

子どもたちと指導者の両者が毎時間、新たな Research、Anticipation・・・の RAAR サイクルをくり返し、学びを積み重ねることで、子どもたちの「確かな学力」は育成される。指導者は子どもたちへの働きかけや、自分の行った指導のふり返しをしながら、指導改善し続ける。

2. RAAR サイクルの視点を踏まえた学習を支える「いち推シート」について

RAAR サイクルの視点を踏まえた学習を積み重ねることで、子どもたちの「確かな学力」の向上と、指導者の指導改善が促される。子どもたちの言語活動の充実に向け、子どもたちが主体的に学べる授業づくりをするための共通シートを作成した。このシートが仮説にも記述のある「いち推シート」である。このシートは単位時間の学習の中で、指導者が子どもたちにとって、確かな学力が身につくと期待している部分、つまり学習の「いち推し」の活動にあたる部分に「推」の文字を目印として書くようにしている。このシートはどの教科学習でも、授業構想を練るために活用することができる。（図5参照）

これらの各項目に書き込むことにより、単元レベルの学習の構想を練ることができる。「いち推シート」の活用のポイントを3点挙げる。

単元名：	単元目標：	2026/1/5		
(教材名：)	(本時 / 5)	授業者 ()		
単元レベル	【課題の設定・現状把握】 Research	【見通し・めあての設定】 Anticipation	【言語活動を通した学び】 Action	【振り返り】 Reflection
	<input type="checkbox"/> 子どものレディネスの把握	<input type="checkbox"/> 単元のゴールの姿の明示・共有	<input type="checkbox"/> 言語活動をとり入れた、主体的・対話的で深い学びの展開 子どもに提示したもの（映像等も含む）：	<input type="checkbox"/> 単元を俯瞰した・日常生活と関連するふりがえり
子どもたちの単元のゴールの姿(どのようなことができるようになっているか)				
☆本時のいち推しポイント：				
本時レベル	①【学習すること】		②【言語活動】	
	【Anticipation:見通し・めあての設定】 <input type="checkbox"/> 本時に取り組むことをわかっている。めあてを子どもが自分で書く。	※レディネス 【Research: 課題の設定・現状把握】 <input type="checkbox"/> 教室環境・整理整頓 <input type="checkbox"/> 学びの足跡等の環境 <input type="checkbox"/> 時間への意識 <input type="checkbox"/> ふりがえりを含めた既習事項の把握	③【ふり返り】 【Action: 言語活動を通した学び】 <input type="checkbox"/> 言語活動を通した考えの更新 【Reflection: 振り返り】 <input type="checkbox"/> 自分の考えの更新の実感 <input type="checkbox"/> 次時への意欲の高まり	姿
※一時間の授業の中で一番の見どころに「推」マークを付けてください。				

図5 「いち推シート」のフォーマット

(1) 単元レベルのRAARサイクルの視点を踏まえた学習の流れの可視化（小学5年社会科を例に）

図6のように、取り組む単元で言語活動を通して、子どもたちにつけたい力が身につけている姿（単元のゴールの姿）を明記しておく。これにより、指導者は子どもたちが単元のゴールの姿に到達できるよう、指導計画を立案するようになる。一覧になっているので、単元の学習の流れを意識して授業づくりがしやすい。そのため、見通しをもって指導者は指導を進めることができる。（子どもたちが作る学習計画は後述）

学習のゴール名： イチオシ！工業の工夫や成功の秘訣交流会をしよう！ (単元名：工業生産とわたしたちの暮らし)		単元目標：我が国の工業生産について、盛んな地域が広がっていることや、国民生活の工場への寄与、様々な人々の努力によって工業が成り立っていることを理解し、それらを考え、表現することができる。		(本時 1 / 14)	授業者 ()
単元レベル	【課題の設定・現状把握】 Research	【見通し・めあての設定】 Anticipation	【言語活動を通した学び】 Action		【振り返り】 Reflection
	□子どものレディネスの把握	□単元のゴールの姿の明示・共有	□言語活動をとり入れた、主体的・対話的で深い学びの展開 子どもに提示したもの（映像等も含む）：画用紙（84サイズ）を示しながら、学習の学びを友だちに1分程度で伝える様子を示す教師の例示 あるいは動画		□単元を俯瞰した・日常生活と関連するふりかえり
子どもたちの単元のゴールの姿(どのようなことができるようになっていくか) 学び伝えるために必要な資料を画用紙 OR クロームブックで提示しながら、友だちに説明する姿。(場面緘黙の児童など、難しい場合は合理的配慮をする。)					

図6 5年生社会科のいち推シートの上半分(単元レベル)部分

(2) RAARサイクルの視点を踏まえた学習の単位時間ごとの構想メモとしての活用
(※参観者との共通理解に活用できる「指導構想共有メモ」としても活用)

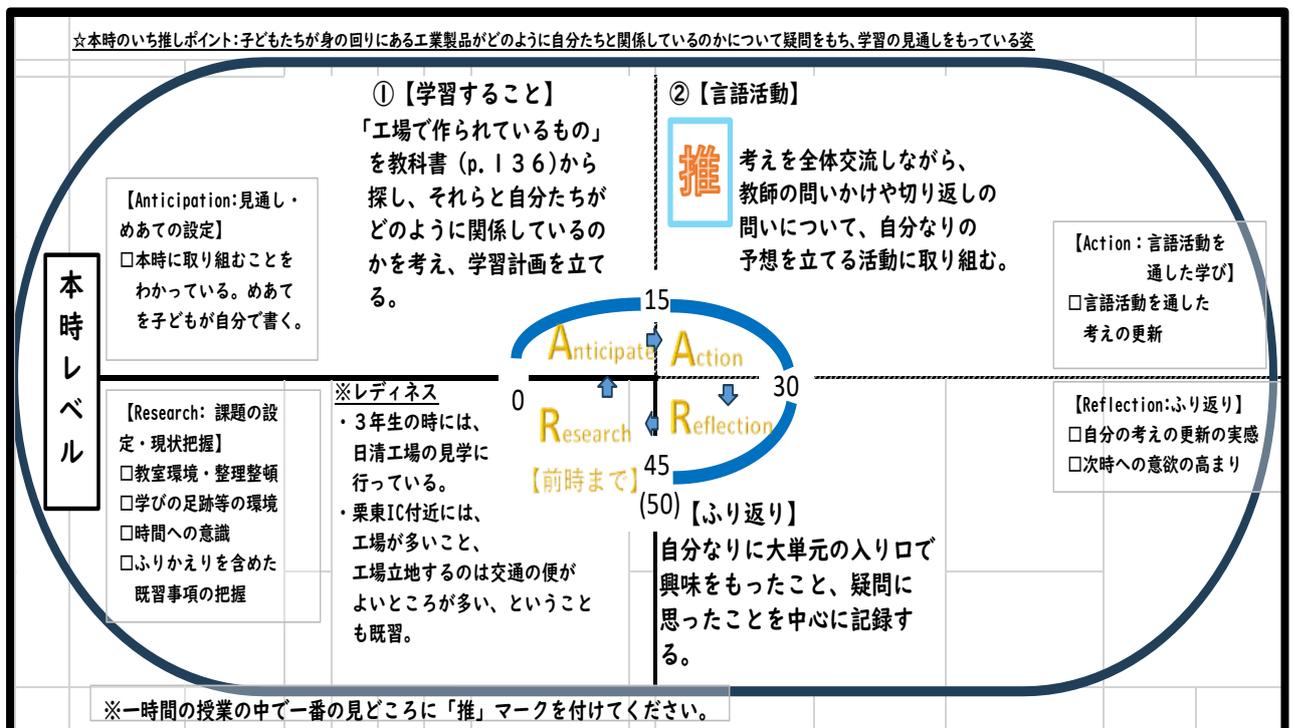


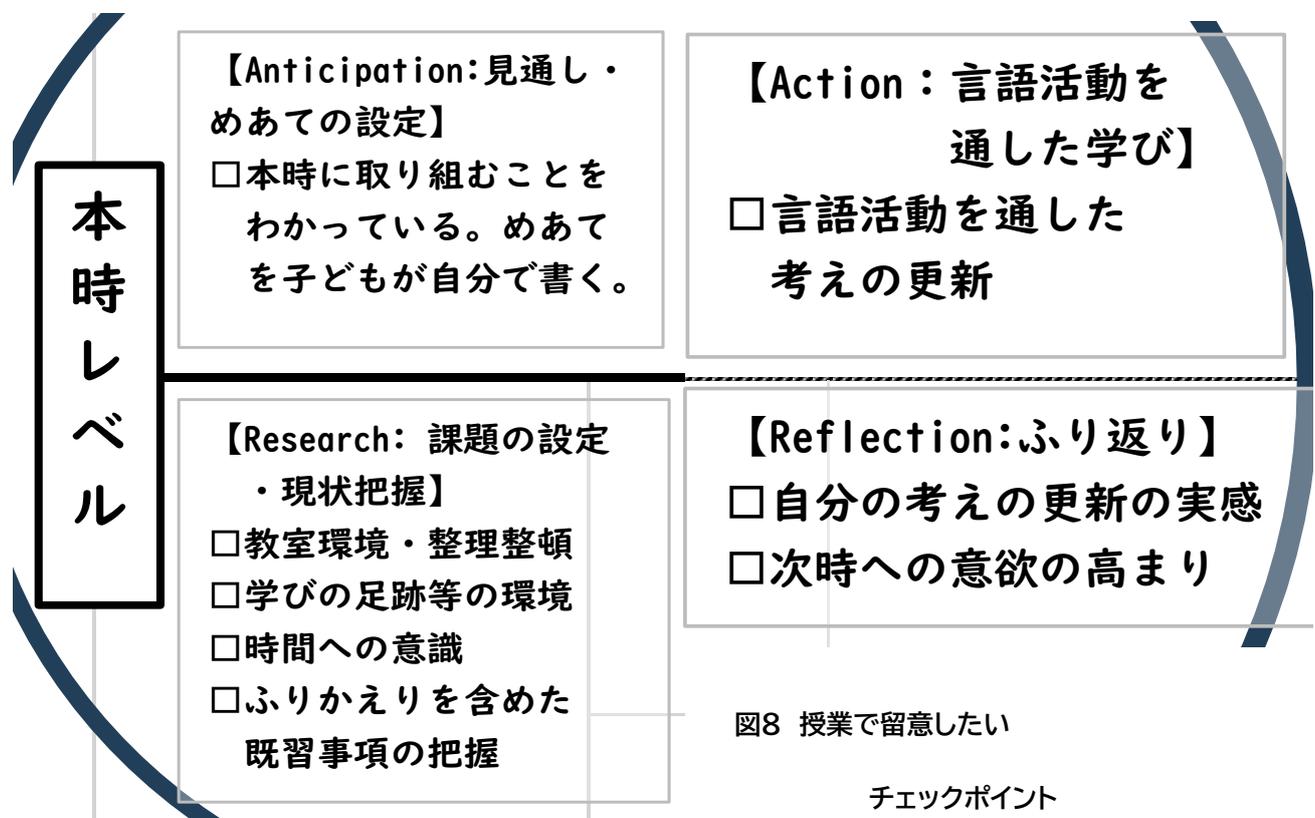
図7 5年生社会科のいち推シートの下半分(本時レベル)部分

RAAR サイクルの視点を踏まえた学習を実践するために、下半分では、図7のように、便宜上15分ごとに線を入れているが、あくまでも目安とする。自分で指導計画をメモするために活用でき、細案を改めて書き足すこともできる。また、教員同士で参観し合う際、一目見て「単元の魅力的なゴールはどのようなことか」「どのような姿を目指しているのか」等を把握できるようにした。図7の「推」マークを中心に参観することで授業者がその学習で大切にしたい見どころがわかる。場合によっては、参観者といち推シートを共有して、授業や教室環境等を批評し合ったりすることもできる「指導構想共有メモ」として活用できる。

(3) 指導改善に繋がる、授業で留意したいチェック項目の明示

図8のように、指導する際に、指導者は常に様々な要素に気をつけたい。教室環境、子どもの躰きの把握など、1単位時間内ですべてを完璧にするということは簡単ではない。しかし、できるかぎり万全の状態にしておきたい。それらのことを自分で確認できるように、本時レベルのチェック項目を明示している。

この図8のチェック項目を通して、指導者は自分の授業について、ある程度、客観的にふり返ることができる。場合によっては、改善を要する場合もある。そのため、以下のような改善方法の案を裏面に印刷してある。このシートへのチェックを通して、よりよい教室環境・授業づくりができ、指導改善につながることを期待している。



※いち推シートの裏面には、図9のいち推シートのチェック項目の詳細を記載

項目	内容	チェック	達成するための方法（例）
【Research : 課題の設定・ 現状把握】	<input type="checkbox"/> 教室環境・ 整理整頓		<ul style="list-style-type: none"> ・机・いすのねじは締まっているか。グラグラしているいすはないかチェックする。あればすぐに締める。 ・日直当番の声かけ等、日課に組み入れる。（支持的な雰囲気醸成・子どもたちの生活への位置づけ）
	<input type="checkbox"/> 学びの足跡等の環境		<ul style="list-style-type: none"> ・前時までの学習内容を簡単に見える化しておく。（側面掲示など）
	<input type="checkbox"/> 時間への意識		<ul style="list-style-type: none"> ・指導者が学習開始時に教室にいる。 ・終了時刻を指導者が守る。
	<input type="checkbox"/> ふりかえりを含めた既習事項の把握		<ul style="list-style-type: none"> ・前時のふり返りノートの記述内容を、1、2人はフィードバックできるように写真等で残しておく。（次時の参考に）
【Anticipation : 見通し・めあて の設定】	<input type="checkbox"/> 本時に取り組むことを子どもたちがわかっている。		<ul style="list-style-type: none"> ・単元導入時に子どもと一緒に学習計画を立てる。
	<input type="checkbox"/> めあてを自分で書き始めている。		<ul style="list-style-type: none"> ・側面掲示をはじめとする学習計画の見える化をする。
【Action : 言語活動を通じた学び】	<input type="checkbox"/> 言語活動を通じた考えの更新		<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを構築した上で（できればノート等に記録してから）友だちと交流する。
【Reflection : ふり返り】	<input type="checkbox"/> 自分の考えの更新の実感		<ul style="list-style-type: none"> ・はじめの考え（初発の感想や単元のはじめの考え等）を残しておき、ふり返ったり、見直したりする時間を確保する。
	<input type="checkbox"/> 次時への意欲の高まり		<ul style="list-style-type: none"> ・（満足感のある）学習の最後に、自分の言葉でその単位時間の学びをまとめる時間を確保する。

図9 いち推シートのチェック項目(裏面)の詳細

3. 子どもがRAARサイクルの視点を踏まえた学習をすすめる「学びの記録シート」について

学びの記録シート（滋賀県総合教育センターの「学びの足あとシート」を参考）を用いて、毎時間と単元全体をふり返る。子どもたちは学習のゴールを見据えて、めあてとふり返りを毎時間意識して学習に取り組む。（図10）

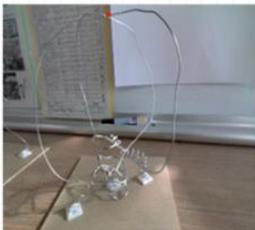
今年度は全教科の実践はできていないが、どの教科でも実践できる取り組みであると考えている。本研究では、国語科、図画工作科、体育科そして社会科で取り組む。図画工作科では、学びの記録シートの代用となるシートをMetaMoJiで作成する（図11）。体育科でも様式を少し変えて、学びの記録シートを活用する（図12）。指導者は、子どもの学びの変遷が一目でわかるポートフォリオとしても活用できることが期待できる。

以下にいち推シートの効果を3点述べる。

美しく立つはり金

めあて

針金を工夫して立たせよう♪



ふりかえり

土台に2つ、違う形の針金を立てることを頑張りました。今まで、ねじったり丸めたりすることは簡単だと思っていたけど実際にやってみると以外に難しくびっくりしました。

次回に向けて（次回のめあて）

次の時間は球体を作ったりビー玉を、飾れるようにしたいのと、針金を曲げることを頑張りたいです。

動画でも針金を簡単に変形させていたけど、実際にやってみるとなかなか上手いかわからないこともありませうね。何度もチャレンジ！針金は多少失敗しても大丈夫！やり直せます

図11 MetaMoJiによるふり返りの例(図画工作科)

5月22日	4月18日	3月17日	2月12日	1月11日
学習活動 ポスターの準備 めあて ポスターを完成させる	学習活動 ポスターの準備 めあて ポスターを完成させる	学習活動 整理発表表 めあて 出た意見をまとめる	学習活動 対話 めあて 対話をし合って意見を整理してまとめる	学習活動 対話 めあて
今日の学習のふりかえり ポスターの準備を完了させた。発表の準備も進んでいる。	今日の学習のふりかえり ポスターの準備を完了させた。発表の準備も進んでいる。	今日の学習のふりかえり 今日の発表の準備も進んでいる。発表の準備も進んでいる。	今日の学習のふりかえり 今日の発表の準備も進んでいる。発表の準備も進んでいる。	今日の学習のふりかえり 今日の発表の準備も進んでいる。発表の準備も進んでいる。

図10 学びの記録シート(国語)

5年生体育科学習カード・ボール運動(ゴール型:ハンドボールをもとにしたゲーム)

みんなが楽しめるハンドボールをしよう

時刻	2	3	4	5	6	7
5	準備運動					
10	基本練習・チーム練習			リーグ戦をしよう		
15	作戦タイム			第1試合 前半5分 ハーフタイム2分 後半5分		
20	オープン戦			作戦タイム		
25	前半5分 ハーフタイム2分 後半5分			第2試合 前半5分 ハーフタイム2分 後半5分		
30	学習のふりかえり・まとめ・後始末					

☆学習全体(7時間分)のめあて☆

① 準備・後始末	出たばかり練習時間をいかに
② できるようにしたいこと	早くせつ手ておつちにはやくにたす!
③ 気をつけること	人にあたらないようにせいかくにたす!!

☆毎時間のふりかえり☆

回数	月	日	めあて	チェック	学習のふりかえり
2	10	29	① 0	△	チームワークが良かった
			② △	○	試合の準備ができた
			③ ○	○	

今日のMVP:

理由: ティームワーク

回数	月	日	めあて	チェック	学習のふりかえり
3	11	5	① 0	○	試合の準備ができた
			② 0	○	試合の準備ができた
			③ 0	○	試合の準備ができた

今日のMVP:

理由: 早くせつ手て、まぐねていた。お上手い!

もう一回! DFは前に5秒は意識しよう!

図12 学びの記録シートの例(体育科)

(3) 子どもが自分でめあてを立て、それに対してふり返る活動の日常化ができる

学習計画・活動を学級で共有した上で計画しているので、毎時間学ぶ内容を子どもたちは共通理解している。その上で、どのように取り組むかを確認、「学習の構えをつくる」時間として、学習の始まりに、学習のめあてを自分で立てる。(図16)将来的には、学習の始まりのあいさつを終えたら、何も言わなくても、「今日のめあては、〇〇を工夫して～～のように取り組みます。」というように書き始め、自分たちの学習を自分たちで進め、学習の終わりには、めあてに対するふり返りを自分で立てることができるようになることを期待している。このような取り組みを通して、主体的に学ぼうとする学級風土づくりもできる。

2/14	1/14	今日の学習のふり返り
今日のめあて ほろくく書き方を覚える	今日のめあて ほろくく書き方を覚える	今日の学習のふり返り
ほろくく書き方を覚える	ほろくく書き方を覚える	今日の学習のふり返り

図16 板書例に対応する
学びの記録シート

4. 研究成果の検証について

本研究において、RAAR サイクルの視点を踏まえた学習をとり入れた実践によって、子どもたちの確かな学力の向上と、指導者の指導改善に結び付いたかについて、学習中の子どもたちの様子や指導者の姿、学習の成果物などから見取り、研究成果の検証を行う。(質問調査の内容と意図は巻末資料^{★1・★2}を参照。)

また、子どもたち向け質問調査と指導者向け質問調査を研究の始期と終期(実施単元の数に応じて、可能な学級は中期にも)に実施し、子どもたちや指導者たちの学習・指導に対する意識の変容を分析する。

V. 研究の進め方

1. 研究の方法

- (1) 本研究の目標・意義等について、研究協力校の担任団と共有する。
- (2) 研究始期に、研究協力校3校(A校・B校・C校)の子どもたちを対象にした質問調査を実施し、RAAR サイクルの視点を踏まえた学習の状況や、学習に対する構え等についての現状を把握する。
- (3) 研究始期に、研究協力校3校(A校・B校・C校)の指導者にも 質問調査を実施し、RAAR サイクルの視点を踏まえた学習の取組状況を把握する。
- (4) 年間1～3回、研究協力校の指導者と RAAR サイクルの視点を踏まえた学習を単元レベルで構想し、実践を通しながら、効果が見られた手立てや支援について明らかにする。
- (5) 単元の授業実践後に、研究始期と同様の質問調査を子どもに行い、結果の変容等を分析することで、取組の成果検証を行う。
- (6) 研究終期に、始期と同様の質問調査を研究協力校の指導者にも実施し、結果の変容を分析することで、取組の成果検証を行う。(必要に応じて聞き取りを行う。)

2. 研究経過

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
研究の方法・内容	研究構想・研究推進計画の立案・派遣校交渉・決定		質問調査集計①・授業実践記録・教材研究の相談		授業実践記録・教材研究の相談	授業実践記録・教材研究の相談 整理及び分析			質問調査集計②実践記録整理	研究まとめ・発表大会準備		研究のまとめ・研究紀要・報告書作成

VI. 研究の内容とその成果

1. 研究協力校における現状の把握

研究始期に、子どもへの質問調査や、指導者への質問調査を通して、研究協力校の現状を4件法により把握した。グラフから共通して見えてくるのは、「学習のめあてを自分で立てていますか」という設問の数値がどの学級でも約60%以下だったことである。(図17)

このデータからは、どの研究協力校においても、学習開始時に自分で学習のめあてを立てる子どもは半数程度にとどまることが明らかになった。したがって、子どもたちは自分でめあてを立てることはあまりせず、先生の指示しためあてのもとに学習をしているということが推察された。

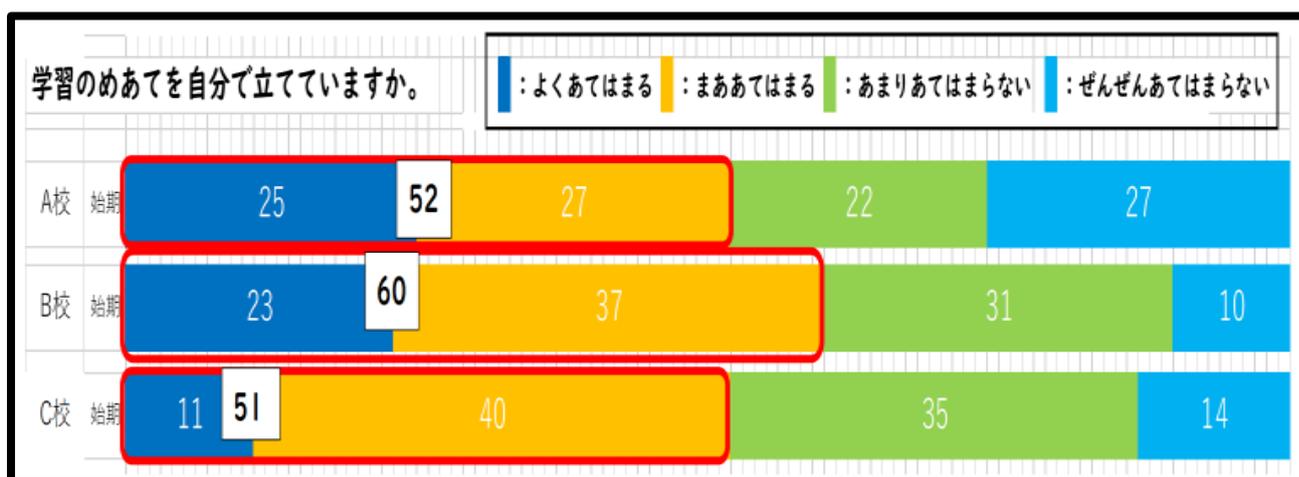


図17 子どもへの質問調査(4件法) (※一部)

また、指導者のアンケートは次のようになっている。(図18)

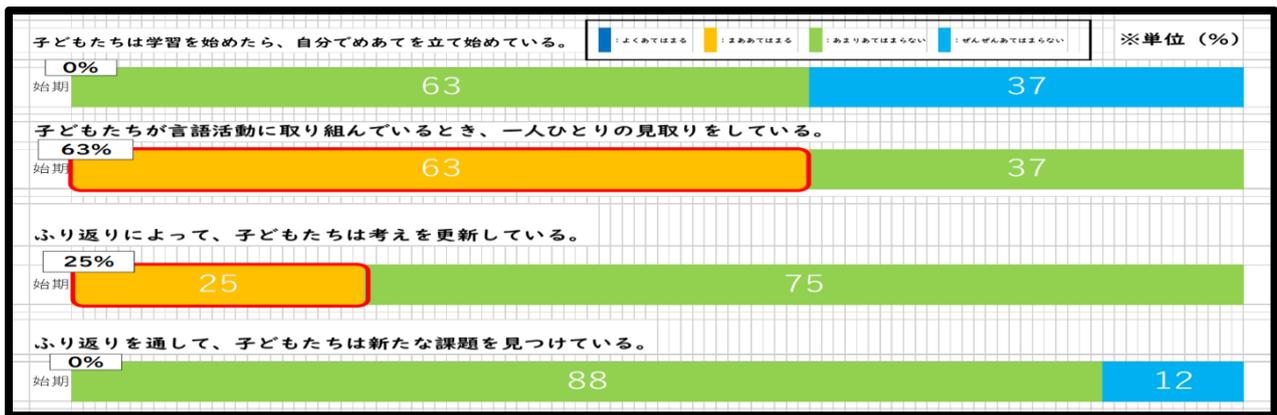


図 18 指導者への質問調査(4件法) ※一部

指導者に尋ねてみたところ、子どもたちは学習を始めたら、自分でめあてを立てることはしていないと感じていることや、ふり返りを通して、新たな課題を見つけているとは感じていないことが分かる。つまり、指導者と子どもたちの思いは一致していることがわかる。これらの現状を踏まえて、RAAR サイクルの視点を踏まえた実践に取り組み始めた。

RAAR サイクルの視点を踏まえた学習を通して、上記の質問調査の数値を上げることが目的になるのではなく、子どもたちが学びの実感をしながら、学ぶことが楽しい、内発的動機付けが高まるような実践につながるように研究協力員の先生方と連携するようにした。

2. RAAR サイクルの視点を踏まえた学習（取組）の実際

(1) Research の段階

単元の指導に入る前に、指導者はこれまでの学習の積み上げについて、まず、学習指導要領と、指導事項配列表一覧等（教科書会社が HP 上にアップしているもの等）を参考に、どのような力が身につけているのかを把握した。さらに、体育科や図画工作科等、可能な場合は前学年までにどのような学習を経験しているのかを子どもたちや、職員室の同僚に尋ねておくことで、より詳細な子どもたちの学習経験を踏まえた指導計画を立てることができる。これらの把握をした上で、身につけてほしい資質・能力がどのように指導すると身につくのかを考え、指導計画を立てた。

子どもたちは、学習の導入時に、「自分たちがどのようなことを学んできたのか」について、ふり返ったうえで、徐々に本単元の学習に入った。例えば、国語科の学習の場合なら、「これまでの物語の学習でどのようなことを学んできましたか？」という問いかけに対して、学級全体で経験を出し合い、それぞれがどのような学びをしてきたかを共有してきた。体育科であれば、一つ前の学年であればどのような教材を通して学んできたのか、ということを通理理解すると、その学びを踏まえて本単元で学習することに意識が向く（図 19）。他教科に関しても、これまでの学習経験を共有することは、本単元に取り組むまでの自分の学びの経験をメタ認知することにもつながり、有意義であった。このレジネンスに基づいた現状把握により、子どもたちはこれまでの学習経験を踏まえて、学習していこうとする様子が見られた。

(2) Anticipation の段階

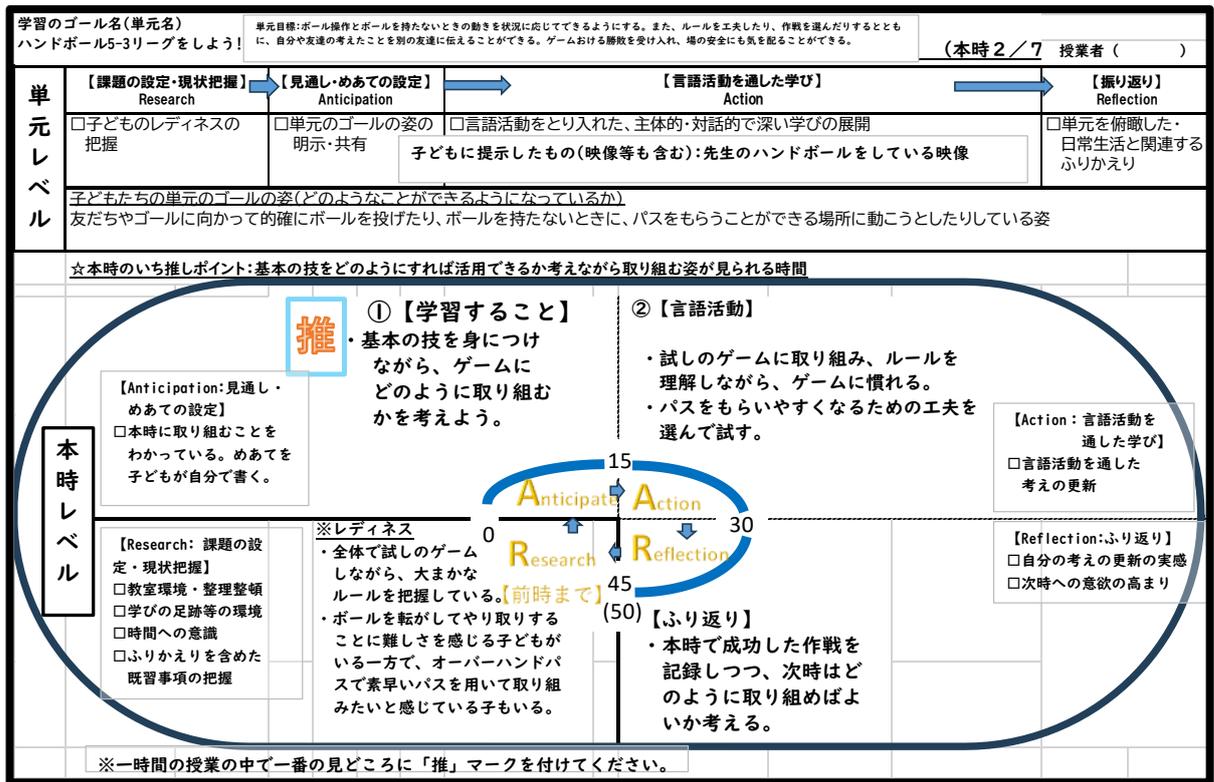


図19 Research を見どころ(推)にしたいち推シート

ア 学習計画を立案する(「単元全体」の大きな流れ)

指導者が提示した魅力的なゴールに向かって、必要な力は何か、どのような学習が必要かという学習計画の立案を、子どもたちは経験をすれば考えることができるようになっていた。例えば、A校の子どもたちは、国語科の学習において、単元の1時間目に、どのような力が必要か、と尋ねたときに、研究始期には少し戸惑う様子が見られたが、研究終期には、「〇〇の力が身につけば、作品の最後まで自分で取り組みそう。」ということ話を話していた。学習の見通しを共有することは子どもたちにとって、非常に有効な支援であることを感じた。

イ 学習計画に沿って、自分でめあてを立てて取り組む(「単位時間ごと」の流れ)

毎時間の学習の始まりには学習活動は共有されているので、その単位時間に取り組む内容を子どもたち一人ひとり把握している。学習が始まると、「自分はどのように取り組むか」のめあてを立てる。その初めの部分を子どもたちに委ねる。学習活動は一人ひとりわかっている、その学習活動に「どのように取り組むか」を子どもたちが決めるようにする。例えば、「学習活動に対して、わかっていないところがあったのでわかるまで調べる」「学習活動に対して、前はあまり詳しく考えられなかったので、今回の友だちとの交流を生かして考えを広げる」など、子どもたちが自分事として学習

に取り組むことができるように、自分でめあてを立てて取り組む。こうすることで、学びに向かう姿勢ができ、学習の最後まで粘り強く取り組んでいた。加えて、学びの記録シートに対応する学習計画を側面に掲示しておくことで、「今どこまでを学習しているのか」「次の時間はどのような学習に取り組む予定だったのか」という「単元全体」を常に見渡すことができる。子どもたちと話し合ったことが紙面にまとめてあるので、常時参考にでき、子どもたちは自分たちの言葉に触れながら、これまでの学習を想起しながら、各時間の学習のめあてを意識することができていた。(図 20)

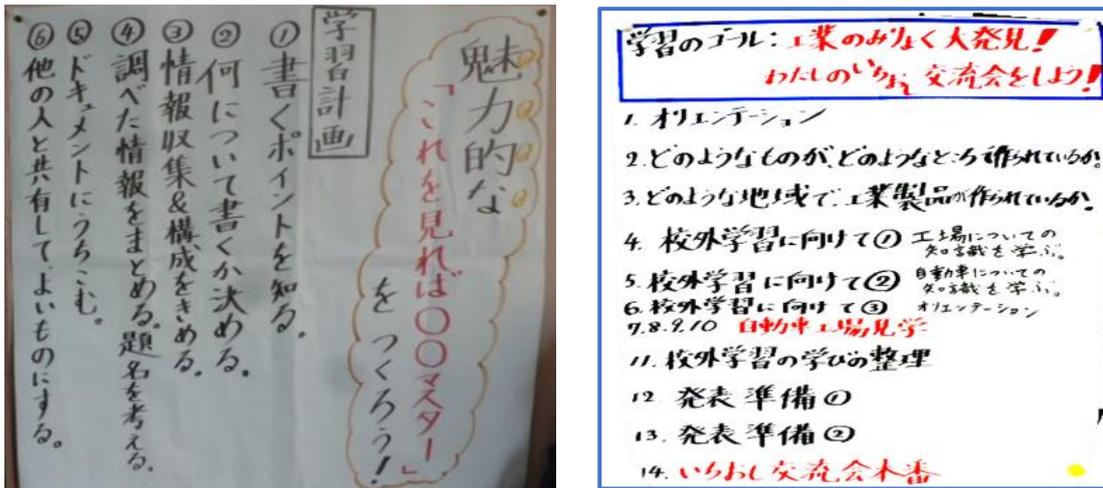


図 20 各教科における側面掲示

ウ 学びの必然性を確認する指導者の声かけ

学習の計画をみんなで立てたものの、子どもたちは本時で取り組むことを忘れることもあれば、学習計画そのものの意味（単元のゴールにどのように結びついているのか）をわかっていないまま、学習に取り組んでいることもある。そこで、学習の最中にも、「この取組をするとどのようなことができるようになるのでしょうか。」のように、学習していることの意味づけを子どもたちと確認しながら進めることで、学びの必然性を確かめながら学習を進めることができていた。

(3) Action の段階

ア 考えを形成する学習

学習を進める際に、自分の考えをもつことなく、受け身で学習をしていては、学びが深まりにくい。まずは、学習課題に対しての自分の考えを形成することが必要不可欠である。そのため、自分で考えをまとめたり、考えたりするための材料を集める時間が必要である。こうして自分と向き合う活動を通して、考えを深め、友だちと学びを交流する準備をする。この活動は、単元の終末に考えを伝え合う（交流する）ことが子どもたちもわかっているので、学習が自分事となり、よりよいものを作成しようという雰囲気生まれる。こうして考えを深める姿が見られた取組を紹介する。

(ア) 書籍を用いた情報収集（職業調べの場合）

一人一冊以上の本を確保して、職業について自由に調べることができるようにする。紙媒体の場合、もともと情報が精選されていることが多いので、自分に必要な情報を集めやすい。

(イ) 1人1台端末を用いた情報収集

(ア)の手法を用いながらも、複数の視点からの情報を得る場合や、書籍から情報を集めることが難しい場合には1人1台端末も活用できる。端末を用いて調べたことを自分の知識として記録し、情報をためこむことができる。

(ウ) 適切な事前指導による、構想メモづくり

図画工作科の学習において、魅力的なゴール（作品例）を参考にして、構想メモをつくる。自分の内面にある思いを文字化することで自分が表現したい形・技法を見える形にすることができる。（この時間は1人1台端末にそのメモを書きこんでいた。）

(エ) 単元の学びを1枚の画用紙にまとめる活動

社会科のまとめのポスターを作る際に、教科書や資料を参考にして情報をメモする。こうしてためた情報を自分で画用紙にまとめる活動を通して、自分の知識を深め、その内容を友だちと伝え合う準備をしていた。

(オ) メインゲームにつながるドリルゲーム

体育科においては、自分たちの活動の質を高めるために、基本の動きを繰り返すことで、ゲームに繋がる運動をした。

イ 考えを伝え合う学習

学びをまとめたことを伝え合うすることで、自分の学びと共通した部分、あるいは異なった部分、考えも及ばなかったことに気づかされる部分など、伝え合う活動を通して、様々な学びが得られる。このように、考えが深まった姿が見られた取組例を紹介する。

(ア) 自分の考えをまとめた「おすすめの仕事」について

C校では、子どもたちの交流会を通して、自分が調べた仕事について、分かりやすく伝えようとする姿や、頷きながら聞いて、納得しているような姿がみられた。感想には、「交流を通して、自分のわかっていなかったことを知ることができた」など、学びは深まっていることが推察された。

(イ) 異学年に向けた本の紹介活動

A校では、単元のゴールに「1年生に絵本紹介をしよう」という学習のゴールを設定して、いかに相手に伝わりやすくお話をするか、が大きなポイントであった。絵本紹介をする前段階にも、「1年生に伝わりやすくするためにはどのようなことが必要か」も含めて、グループで交流しながら伝える準備をしていた。事前のリハーサルでは、「ここはもっと、本を見えるようにした方がよいよ」「声をしっかり出さないと聞こえないかも知れないよ」など、相手意識を持った準備をする姿がみられた。

(ウ) 伝記を通して、自分の生き方を交流する活動

単元のゴール「心にひびいたことを交流しよう～ 生き方交流会～」を設定し、伝記の人物の生き方・人柄などに感銘を受けた部分を伝え合った。この活動を通して、「〇〇の生き方から学んだ友だちの考えを聞いて、自分にはない考え方だったので、取り入れたいと思った」のように、学びが広がる姿がみられた。

(エ) 学年全体の作品を集めた鑑賞会の実施

図画工作科で制作した作品を特別教室にまとめて展示し、「〇校っこ万博」と銘打って、鑑賞会を実施していた。それぞれの気づきを1人1台端末を使って、撮影し、工夫していると感じた部分や自分の作品にもいかせると感じたところなどをMetaMoJiを用いて記録していた。その最中に、一人で黙々とタイピングするだけでなく、友だちと「このねじり方がいいね」「この先っぽ（先端）の形、見習いたいね」などと交流をしながら作品鑑賞する姿がみられた。

(オ) 体育科の作戦タイム

体育科「ハンドボール」の学習中には、毎時間ドリルゲームを通して、身につけた基礎基本をいかして、ゲームにおける作戦の立案につなげていた。作戦タイム中にもそれぞれの工夫が聞かれたが、ゲームでも、声をかけ合って、作戦を実行しようとする姿が随所に見られた。

(カ) 解釈の面白さを交流する活動

古典のおすすめの章段を調べ、相手に分かりやすい形でスライドにまとめる活動を取り入れていた。学習のゴールに向けて、見やすいスライドを作るだけでなく、自分の理解も促進できるように努力していた。このスライドづくりを通して、自分の調べた章段の理解が深まるだけでなく、友だちが調べた章段も詳しく知ることができ、お互いに学びを深め合っている姿がみられた。

(4) Reflection の段階

上記(1)～(3)のプロセスを通して毎時間の学習の振り返りをしつつ、次の時間に向けての見通しももつことができると、学習後もさらに次の学習の時間に向けての動機付けができる。そのために、このReflectionのプロセスを大事にしたい。

ア 単位時間の振り返り

毎時間、自分が立てためあてに対するふりかえりをするを、指導者は声かけをしてきた。初めのうちは、「学習をがんばった」「〇〇についてわかった」という振り返りが多かった。そこで、くり返し「めあてに対する振り返りを書くこと」「学んだことを具体的に書くこと」「次の時間の学習活動を見て、その部分に関して見通しをもてる一言を書いておくこと」などをくり返し指導した。すると、子どもたちにとっては、図21のような振り返りの書き方フォーマットを参考にしながら、学習内容を自分の言葉でまとめ、次時の見通しをもつことができるようになってきた。さらに、その振り返りを次時の学習の始まりに読んで始めると、学習の連続性ができる。このくり返しを通して、子どもたちの学習が「自分の言葉で」つながり、自分で学びを深めることができるようになってきていたと感じる。

5	4	例	3	2	1
日付	日付	日付	日付	日付	日付
学習活動 ドキュメントに打ちこむ。	めあて 調べた情報をまとめる。 さくさん書く。情報にふさわしい題名を考える。	学習活動 調べた情報をまとめる。 題名を考える。	めあて	めあて	めあて
	情報をもとに、納得のいく題名も考えることができた。次はドキュメントに打ちこむ。				

振り返りの書き方のポイント

- ・ 本時の学習活動と自分の立てためあてに対する振り返りを書く。
- ・ 次の時間の学習活動に向けた見通しや意気込みを書く。

※学習の始まりの時に、前の時間の振り返りを見るようにすると、学習の続きから取り組みやすくなります！

図21 振り返りの書き方の例示

イ 単元を通したふり返り

単元の学習の最後に、自分の言葉で学習したことをまとめる。今回は取組としてはなかったが、物語の場合なら、初発の感想を読み返し、その感想に対するコメントをふり返りとして書くこともできるし、単元を通した自分の学びを言語化することにより、学びのメタ認知を促すこともできる。学びの記録シートを活用して、自分の学びの記録を可視化して、よりよい学びに繋がるようにしたい。図 22 のように、単元のふり返りで自分の日常生活にもつながるような内容が見られることを期待している。

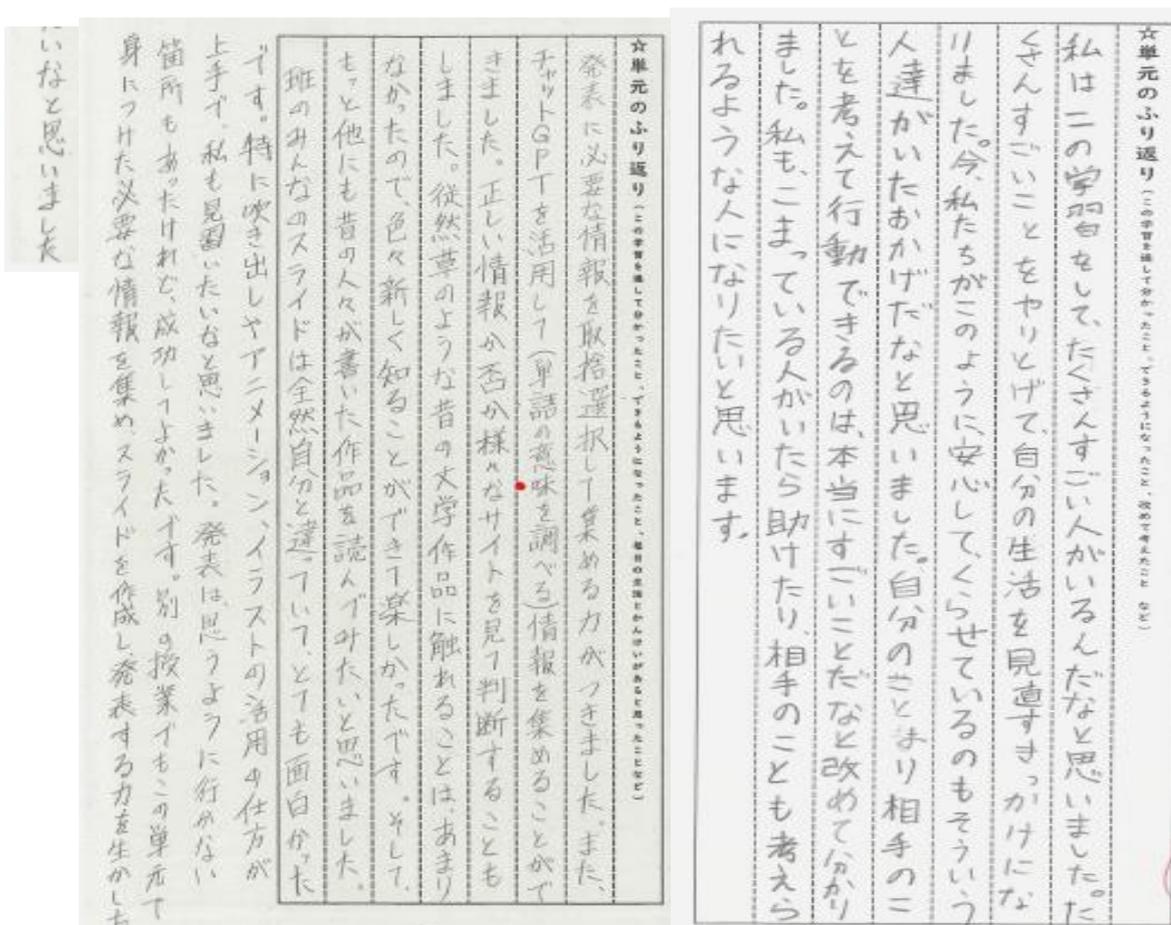


図22 単元のふり返りの一例

3. RAAR サイクルの視点を踏まえた学習を通した取組・教員の指導改善につながる取組の実際

教員の指導改善には、際限はない。裏を返すと、明確な指標が少ない。教員同士では、「子どもをよくみて」といってアドバイスをし合うことがよくあるものの、「子どもをよくみる」ということ自体がわかりにくいことがある。それらも改善できれば、という思いを込めていち推シートを提案している。いち推シートの活用法の例を紹介する。

(1) いち推シートによる授業展開の把握

授業の内容を指導者は感覚的にイメージしていることが多いかもしれない。しかし、いざ授業をしてみると、「〇〇は準備できていたのだけれど、△△の項目についてうっかりしてしまっていた・・・」ということや、同僚に授業を公開するとき、略案でよいのだが、見どころだけを端的に伝えることがなかなか難しい、ということをよく聞く。このような場面でいち推シートが役に立った。初めのうちはこのいち推シートのスタイルに慣れていないのでわかりにくい、という教員がいた一方で、一度わかると授業のポイントがよくわかる、という教員もいた。

指導者としては、授業づくりの際に、いち推シートでメモするか、時系列に縦にメモするか（従来の指導案形式）、頭の中でイメージして、授業の流れの準備をするかなど、様々な場合がある。しかし、他者と自分の考えていることを共有するためには、何らかの形で可視化することが有効である。そこで、いち推シートを使って実践した（図23）。ある指導者は、いち推シートがあることで、RAARサイクルの視点が明確になるので、まずは単元全体の指導計画を簡単にメモすることで大枠をつかみ、指導日が近くなると授業の細案を

赤で追記されていたとのことだった。一方、頭の中でRAARと同じようなイメージの授業構想を思い浮かべているので、メモするまでもなく子どもたちが楽しむ授業ができる、という指導者もいた。

言語活動をとり入れた「いち推シート」(案)

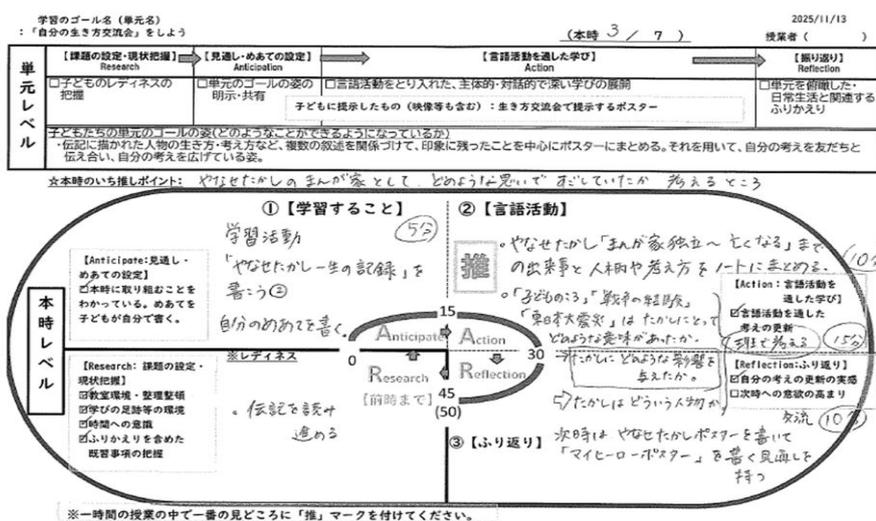


図23 授業前に計画を練るために記入した「いち推シート」の例

(2) 本時レベルの授業チェック

日々の授業を実践していると、教室の環境で、子どもたちの机や椅子のネジが緩んでいたり、教室の整頓の環境が芳しくない状態であったりと、いろいろなことに気づく。もちろん、様々な業務の重なる中、指導している日々なので、学習中は「放課後にやっておくね。」と、子どもにも受け答えしながら、一日の学習を終えとうっかり忘れてしまうこともある。そのようなことを予防するためにも、授業に臨む前に、指導者に各項目をチェックしていただく。すると、自分でチェック項目に印を入れるので、忘れにくくなる、という声を研究協力の先生からいただいた。また、ふり返りの把握や、時間への意識など、ついうっかりしていた・・・という部分を思い出させてくれるリマインダーとしても、い

ち推シートの側面に書いてあるチェック項目が役に立った、ということを知った。

もちろん、普段からすべての項目を網羅されている先生もおられるが、印象的だったのは「毎日完璧にすることは難しいですが、毎時間一つの項目をしっかりとるだけでも、指導するのは一日に6時間あるので、これらの項目は十分網羅できるし、子どもたちにとって必要です。これは必要なことです。」という言葉だった。

さらに、「両側にあるチェック項目のおかげで、各段階（R・A・A・R）で、どのようなことに気を付けるとよいのか、ということを考えながら指導計画を立てることができたので、とても助かった。」という声もあった。

逆に、このいち推シートに書くまでもなく、普段からいち推シートの流れで学習指導をしているという指導者については、RAAR サイクルの視点を踏まえた学習を進めることのがよさが再認識された。

4. 子どもと指導者の変容

(1) 子どもの変容

「学習のめあてを自分で立てていますか」という問いに対しては、A校では25パーセント、B校では13パーセント、C校では、10パーセント向上した。この数値の向上は、子どもたちが自分でめあてを立てて学習していることで、主体的に学ぶことができていることを表していると認識している。（結果的に、指導者の指導スタイルも反映される。）このことから、学習活動を踏まえたうえで、学習のめあてを自分で立てて、学習の始まりに「先生、

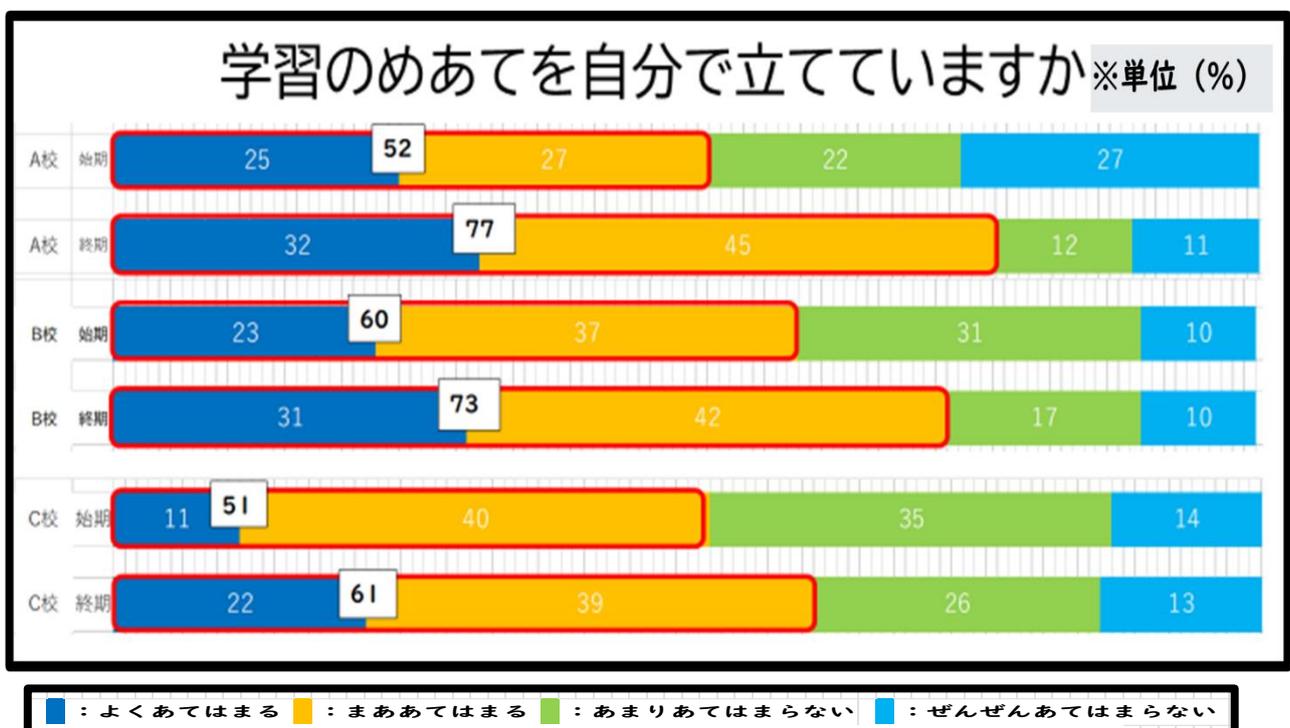


図24 子どもたちへの質問調査の始期と終期の比較

今日の学習は何をするのですか？」という受け身の尋ね方ではなく、「今日は〇〇を学ぶから、△△を頑張ろう」という主体的な学習への転換が促されたことがわかる。確かな学力の一つである「学ぶ意欲」が向上したと考えることができる。したがって、子どもたちの主体性が向上し、学習の構えができるようになったと言える。(図 24)

このことは、自分なりのめあてを設定した上で、学びの必然性のある言語活動を取り入れた学習に子どもたちが取り組むこと、つまり、RAAR サイクルの視点を踏まえた学習そのものが、学びの積み重ねにつながり、これが「確かな学力の育成」につながるということを明らかにしたといえる。

(2) 指導者の変容

研究始期と終期に研究協力校の指導者を対象とした指導者質問調査を実施した。調査の結果を比較すると、多くの項目で数値が向上していた。(図 25) ただし、対象の指導者が少ないため、一人の回答の変化が大きな変化につながっていることを把握したうえで分析している。また指導者の所感を見ると「RAAR サイクルを通して、見通しをもつことができ、子どもたちの学習計画を安定して立てることができた」あるいは「自分も時間の見通しをもって授業をすることができたのでつけない力を明確にすることができた」など多くの成果とみられる記述があった。これらのことから RAAR サイクルの視点をふまえた学習を実現

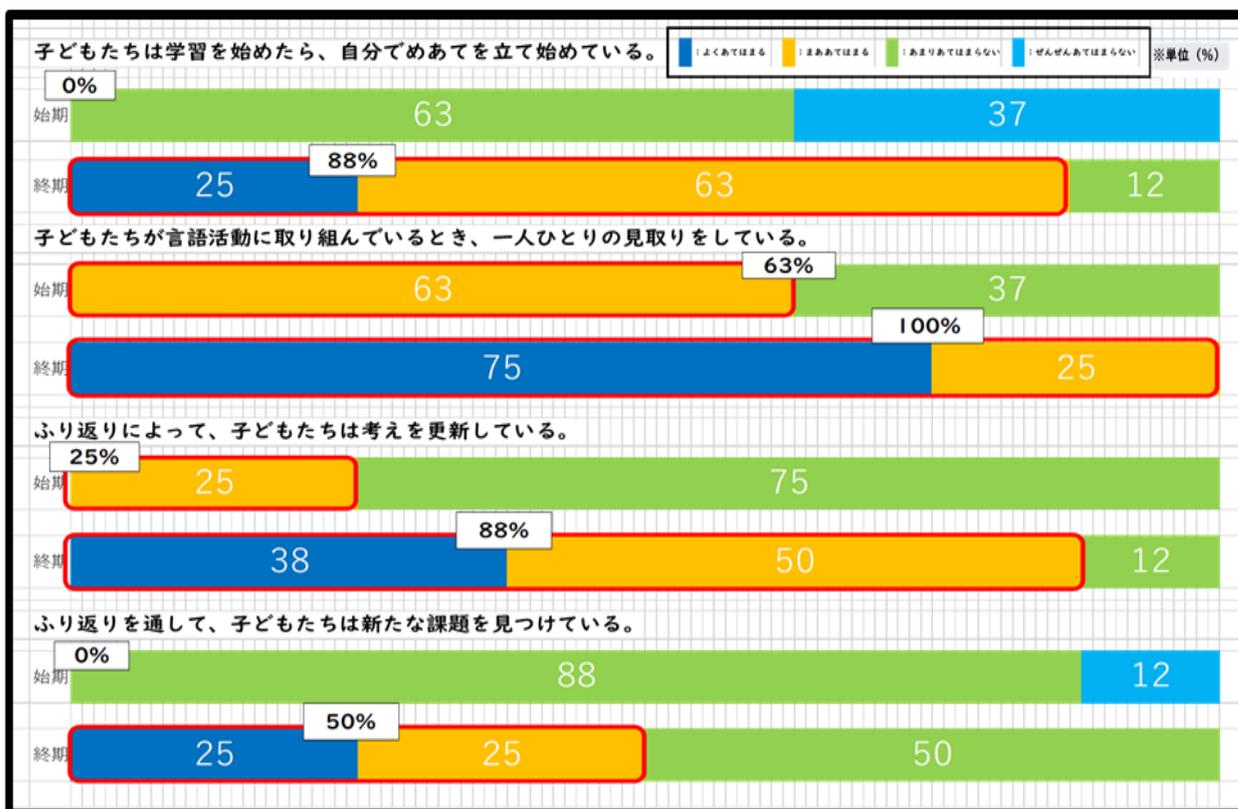


図25 指導者への質問調査の始期と終期の比較

するには「いち推シート」や「学びの記録シート」を活用しながら、魅力的なゴール設定をするという指導の手立てが効果的であるということがわかった。

なお、指導実践後の指導者への聞き取りでは以下のようなふり返りが聞かれた。

【RAAR サイクルについて】

- ・魅力的なゴールを設定していることで、学習の見通しを「指導者も」「子どもたちも」もつことができた。
- ・毎時間の習慣化（ルーティン化）がこの学習スタイルを継続する要因になった。
- ・指導者としても子どもに合わせて授業づくりを意識するようになった。
- ・他教科でも RAAR サイクルは必ずついてくるので、参考になった。
- ・目的意識があると、ゴールに向かいやすい。（やらされ感がなくなる。）
- ・また、「これまでは、毎時間〇〇をするよ！」と子どもたちに説明しながら進めていた学習が、「単元全体を見通して、次は△△だね」のように子どもたちと確認しながら指導を進めることができるようになった。
- ・「RAAR という流れを意識することで、R（ふり返り）を踏まえて、R（レディネスに基づく現状分析）をして、学習を進める、という「学習のつながり」ということが感覚的に身についたと感じられてよかった。

【いち推シートについて】

- ・いち推シートがあることで授業の準備がしやすくなってとてもよかった。
- ・両側の側面にあるチェック項目は、ベテランになっていくと、無意識に（把握）しているイメージがある。
- ・このチェック項目（教室環境等）があるとわかりやすかった。

【学びの記録シートについて】

- ・（見通しをもてるので）学びの記録シートを今後も使っていきたい。
- ・子どもたちが「学びの記録シートはないのですか」と聞くぐらい定着した。
- ・学びの記録シートによって、学びの道筋が見えるようになった。
- ・子どもたち自身が、「自分たちはこのような力があるのではないか」ということを考えていた。（この学習では最後に〇〇するから、▲▲の力を口時間目にはつけておいた方がよいと思う、といった形で。）
- ・学習に見通しがもてるようになり、子どもたちも学習しやすくなった感覚がある。

【その他】

- ・いち推シート・学びの記録シートを活用することで、普段取組んでいたことも『見える化』できた、という印象がある。

Ⅶ. 研究のまとめと今後の課題

1. 研究のまとめ

- (1) RAAR サイクルの視点を踏まえて、言語活動を取り入れた学びの必然性のある学習を実践すれば、子どもたちの確かな学力の育成につながる。
- (2) いち推シートを活用して、RAAR サイクルの視点を踏まえた学習を実践すれば、指導改善につながる。

2. 今後の課題

教員の学級経営に関しては言語化しにくい部分がある。指導改善したとしても、即座に子どもたちが意欲的に取り組むようになるとは限らない。そのため、日々の学習に向けた指導改善を絶え間なくし続ける必要がある。本取組を通じ、子どもたちが自らめあてを立て、学習を構築しようとする姿が、6月当初と比較して顕著にみられるようになった。一方で、それらの変容が必ずしもアンケートの数値に反映されていない側面も確認された。子どもたちの実感と、実際の姿とのギャップに研究協力員も疑問を呈することがあった。アンケートの数値を扱う際には、「数値はあくまでも一側面であり、記述内容や行動観察（の積み重ね）こそが学力向上の証拠である。」ということ踏まえておくことが必要である。一方で、アンケートの数値を謙虚に受け入れる姿勢をもっておくことも大切である。

RAAR サイクルの視点を踏まえた学習の積み重ねが、確かな学力の育成につながると考え、指導者は常にその視点を意識して日々の指導を続けることが肝要である。特に導入の Research の部分で、子どもと学習計画を立てる際に、子どもたちにもっと委ねると、より当事者意識が高まるのではないかと思う場面もあった。今年度明らかになったことを踏まえて、より詳細な条件も整備した上での検証が必要であると考えられる。

やはり、確かな学力は数値では測りにくいものであり、地道な実践が必要であるので、子どもたちだけでなく、指導者も粘り強く指導・支援し続ける必要がある。そして、子どもたちの確かな学力の育成がなされ、生きる力が身につくよう、今後も取り組んでいく。

Ⅷ. 文 献

- ※1) 全国学力・学習状況調査／栗東市 (2024)「令和6年度全国学力・学習状況調査 栗東市の結果について(概要)」栗東市教育委員会学校教育課
<https://www.city.ritto.lg.jp/soshiki/kyoiku/gakkokyoiku/oshirase/1192.html> (参照 2025-5-1)
- ※2) 確かな学力 - 文部科学省 (2025)「これからの時代に求められる力とは？」文部科学省
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/korekara.htm (参照 2025-5-25)
- ※3) 高須賀 美雪 (2017)「学級での居心地のよさが学力に与える影響について (概要)」政策研究大学院大学
<https://www.grips.ac.jp/cms/wp-content/uploads/2015/10/MJE16204%e9%ab%98%e9%a0%88%e8%b3%80.pdf>
(参照 2025-6-25)
- ※4) 白井 俊 (2020)『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来』ミネルヴァ書房

Ⅸ. 資 料

☆1 質問調査（子どもたち用・指導者用）のアンケート項目と、RAAR サイクルの視点と、その結果の見取り方について

（1）児童向けアンケート

以下の聞き取り項目について4段階で調査した。これらのアンケートは、それぞれ子どもたちの以下の状況を測定する指標として実施する。この結果がどのように変容していくかを研究の成果の指標とする。①は Research、②③は Anticipation、④⑤は Action、⑥⑦は Reflection に該当する内容である。各アンケート項目の結果の見取り方についても表に記した。

	アンケート項目	RAAR サイクルの視点	結果のみとり
①	〇〇科の学習は楽しいですか。	Research	子どもたちにとって、学習が取り組む意欲を喚起する学習であったことがわかる
②	前の時間の（学習ノート）ふり返（かえ）りを見てから学習を始（はじ）めることが多いですか。	Anticipation	前時までの学びのつながりを意識して、学習に取り組もうとしているかどうか
③	学習のめあてを自分で立てていますか。	Anticipation	子どもたちが自分でめあてを立てて学習しているか、主体的に学んでいるかが読み取れる。（逆に言うと、指導者の授業スタイルも反映される。）
④	自分の考えを書いたり、書いて学（まな）びを深（ふか）めたり、友だちと考えを伝（つた）え合ったりする学習を進めることで、学習がわかりやすくなりますか。	Action	言語活動が子どもたちにとって学習に対する理解を促すもの、学びを深める活動として、有効な手段となっているかを測定する。（指導者にとっても、言語活動が子どもたちにとって学びを促すものになっているかを把握できる。）
⑤	友だちと考えを交流（こうりゅう）することは、自分のためになっていると感（かん）じますか。	Action	言語活動が、子どもたちの学びに対する価値（学びがい）を高めているかをみとることができる。
⑥	ふり返（かえ）りをすると、	Reflecti	ふり返ることで学びが深まるかどうかの主観的

	学んだことがよく整理(せいり)できると感(かん)じますか。	on	な評価を子どもに聞いている。ふり返りの有効性を実感すればこの数値が上がる。
⑦	ふり返りをすると、次(つぎ)の時間が楽しみになりますか。	Reflection	ふり返りをすることで次時の学習への動機付けにつながるかがわかる。

(2) 指導者向けアンケート

(1) のアンケートと同様、研究の始期と終期に実施することで、それぞれ指導者の現状がわかる。この結果がどのように変容していくかを研究の成果の指標とする。①②は Research、③④は Anticipate、⑤⑥は Action、⑦⑧は Reflection に該当する内容である。

番号	質問		結果のみとり
1	既習事項を新しい単元の学習を始める前に把握している。	Research	教材研究の精緻さの向上
2	前時の子どもたちのふり返りを踏まえて学習を展開している。	Research	指導者の指導観・子ども主体の授業づくりの姿勢
3	単元のゴールの姿(具体的なつきたい力)を子どもたちに示して、単元の始まりを指導している。	Anticipation	授業の単元構成の意識の定着(RAAR サイクルの視点を踏まえているかどうか)
4	子どもたちは学習を始めたら、自分でめあてを立て始めている。	Anticipation	学習習慣の定着化・学級の風土の醸成
5	単元を通して、言語活動を意図的に設定している。	Action	子どもたちに合った教材研究
6	子どもたちが言語活動に取り組んでいるとき、一人ひとりの見取りをしている。	Action	指導者の指導と評価の一体化「よりきめ細やかな」評価
7	ふり返りによって、子どもたちは考えを更新している。	Reflection	子どもたちの学びの質の向上の実感。
8	ふり返りを通して、子どもたちは新たな課題を見つけている。	Reflection	子どもたちのふり返りや発言から、学びをつなぐ指導の実現

☆2 質問調査の内容

(子ども用)

このアンケートはみなさんの学習への取り組み方や思いを研究するアンケートです。成績に関係ありませんので、あなたにあてはまるところを一つずつえらんで○をつけてください。(8, 9はあなたの考えを書いてください。)

番号	質問	とてもよくあてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	ぜんぜんあてはまらない
1	国語の学習は楽しいですか。				
2	前の時間の(学習ノートの)ふり返りを見てから学習を始めることが多いですか。				
3	学習のめあてを自分で立てていますか。				
4	自分の考えを書いたり、書いて学びを深めたり、友だちと考えを伝え合ったりする学習を進めることで、学習がわかりやすくなりますか。				
5	友だちと考えを交流することは、自分のためになっていると感じますか。				
6	ふり返りをする、と、学んだことがよく整理できると感じますか。				
7	ふり返りをする、と、次の時間が楽しみになりますか。				
8	満足する学習(よかったと思う学習)って、どのような学習ですか。				
9	毎日の学習がよくわかるように、気をつけていることはありますか。あれば教えてください。				

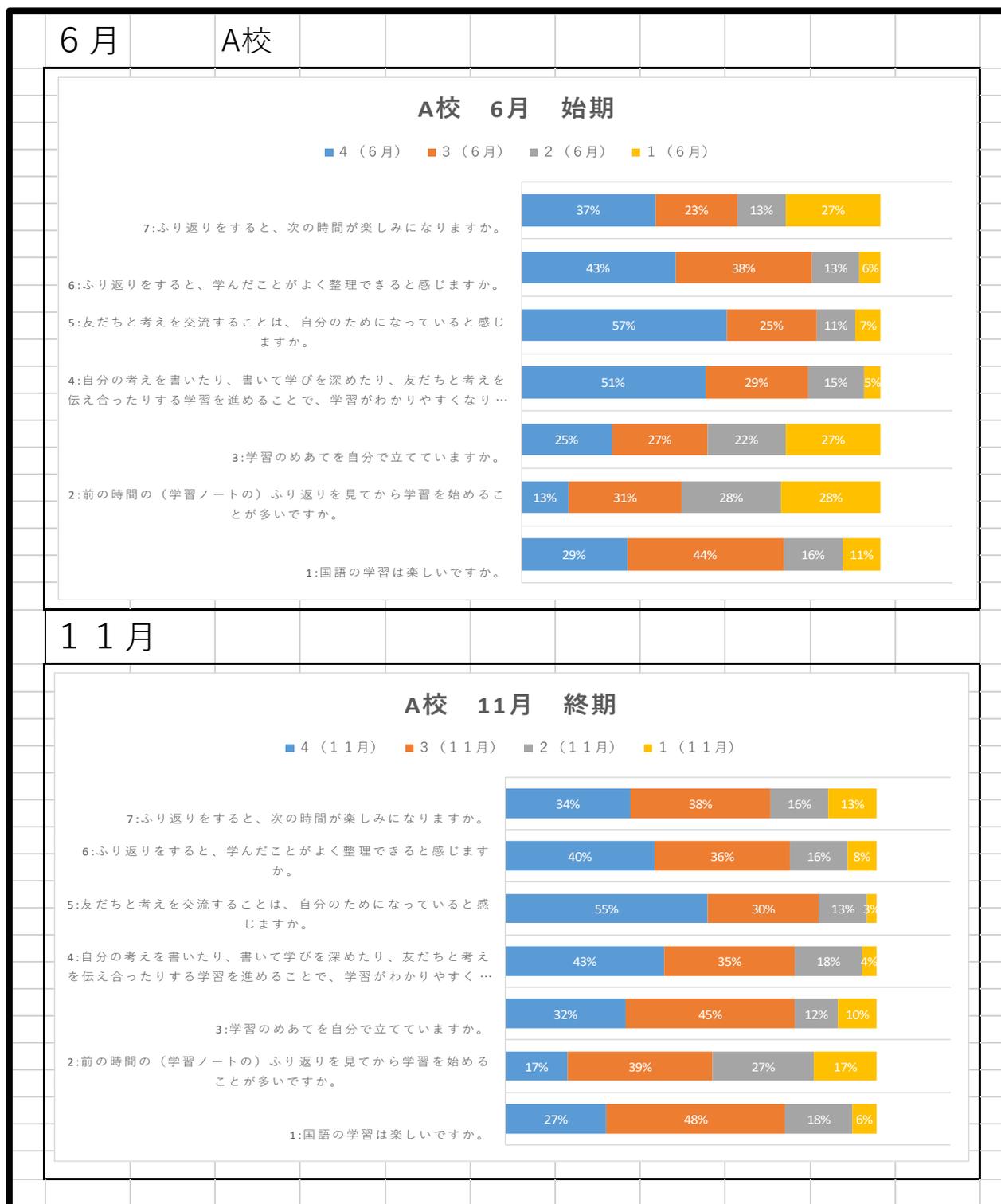
(教職員用)

教職員アンケート 名前 ()

	番号	質問	とてもよくあてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	ぜんぜんあてはまらない
Research	1	既習事項を新しい単元の学習を始める前に把握している。				
Research	2	前時の子どもたちのふり返りを踏まえて学習を展開している。				
Anticipate	3	単元のゴールの姿(具体的なつけたい力)を子どもたちに示して、単元の始まりを指導している。				
Anticipate	4	子どもたちは学習を始めたら、自分でめあてを立て始めている。				
Action	5	単元を通して、言語活動を意図的に設定している。				
Action	6	子どもたちが言語活動に取り組んでいるとき、一人ひとりの見取りをしている。				
Reflection	7	ふり返りによって、子どもたちは考えを更新している。				
Reflection	8	ふり返りを通して、子どもたちは新たな課題を見つけている。				

☆3 アンケート結果（子ども）

(1) A校



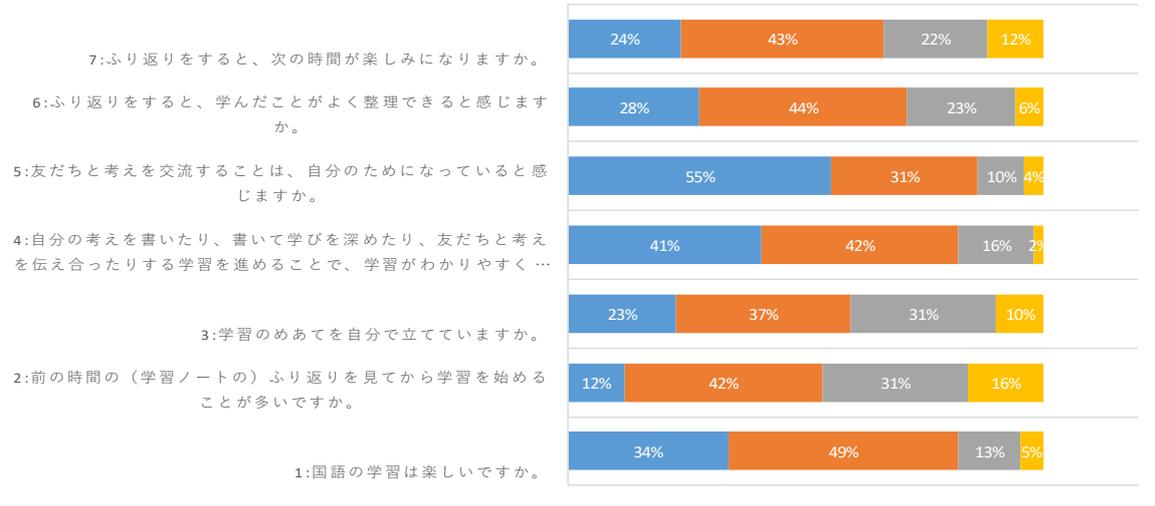
(2) B校

6月

B校

B校 6月 始期

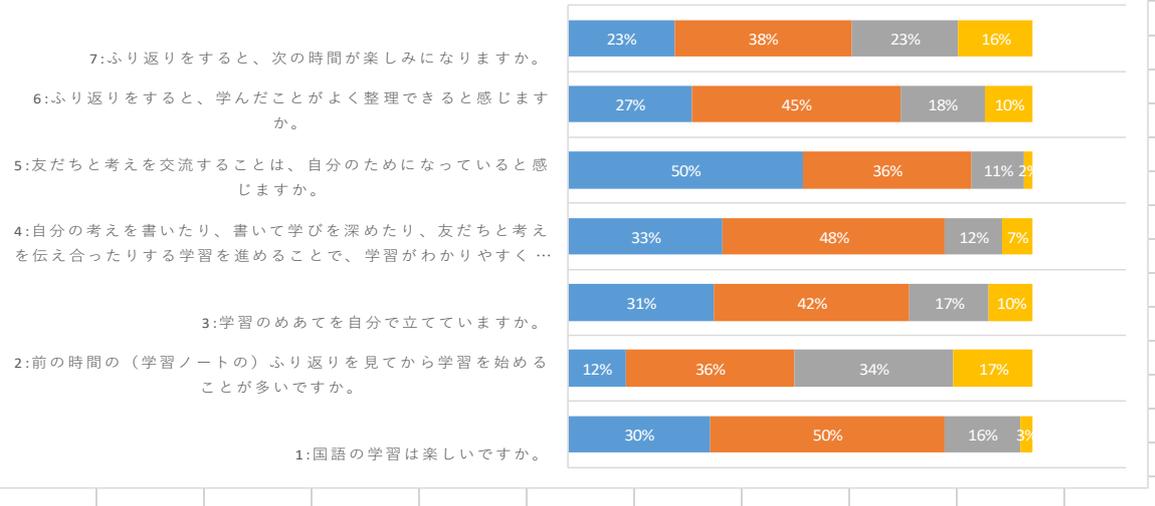
■ 4 (6月) ■ 3 (6月) ■ 2 (6月) ■ 1 (6月)



11月

B校 11月 終期

■ 4 (11月) ■ 3 (11月) ■ 2 (11月) ■ 1 (11月)



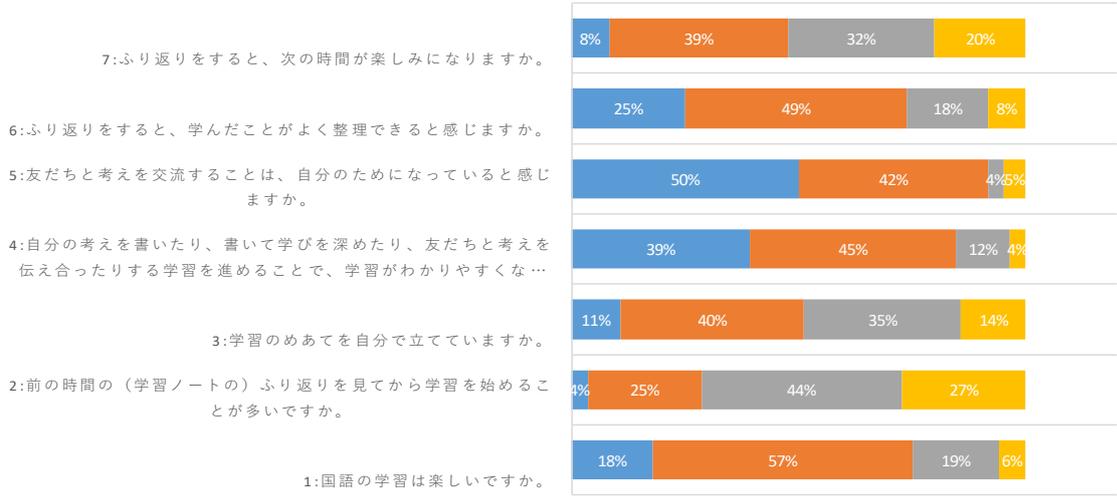
(3) C校

6月

C校

C校 6月 (始期)

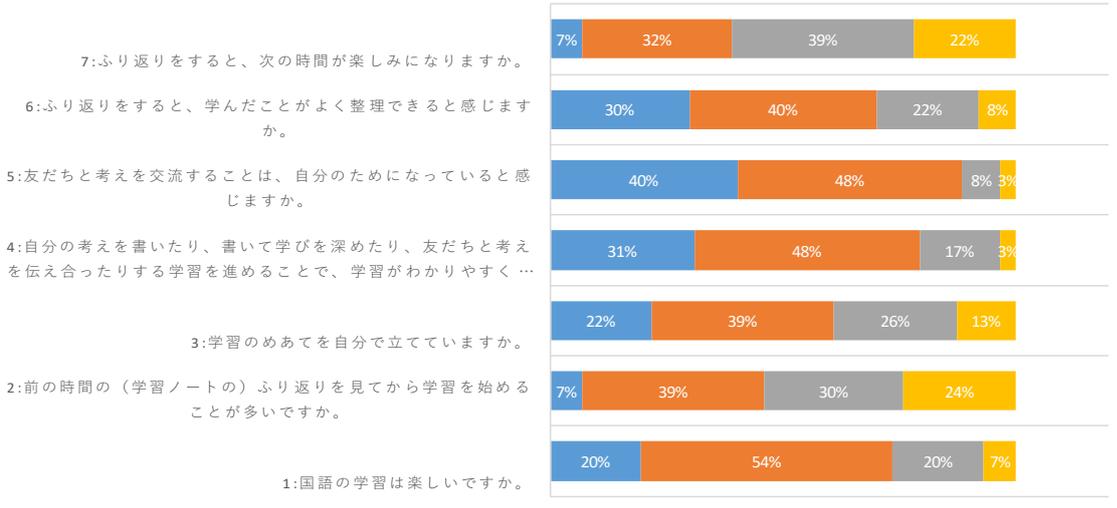
■ 4 (6月) ■ 3 (6月) ■ 2 (6月) ■ 1 (6月)



11月

C校 11月 (終期)

■ 4 (11月) ■ 3 (11月) ■ 2 (11月) ■ 1 (11月)



☆4 教師アンケート

